走り読み文学探訪リバイバル(その７)

「長距離走者の孤独」 著者：アラン・シリトー、谷才一／河野一郎訳

新潮文庫(1973.8.30発行)427円(246p)　　紹介者：榎本博康

［紹介］

こそ泥の少年スミスは，へまをやって警察につかまり，感化院へ。しかし，その俊足を買われてすぐに長距離クロスカントリーの選手に抜擢された。早朝に２時間ばかり，感化院の外の野山を駆けめぐって練習をするのだが，スミスはその走りを心から楽しむ。

何でランニングの練習をするかというと，感化院の院長は，スミスを全英長距離クロスカントリー競技での優勝選手にしたいからだ。それはスミスのためでなく，院長自身の名誉のためだ。反逆児スミスは，５マイルをトップで走ってきて，ゴール手前で立ち止まり，院長の期待をまんまと裏切る。やがて出所すると，こそ泥稼業に一層の磨きをかける。

本書は標題を含む全８編の短編集。1959年初版。

［感想］

ランナーなら読んでおきたい本ということで，いろいろな人の意見を総合すると，はなはだ独断で恐縮だが，①長距離走者の孤独，②遥かなるセントラルパーク，③初秋(順不同)ということになると思う。従って，今回でこれらビッグスリーを読破したことになる。

長距離走者の孤独は，早朝のクロカン走の場面が詩のようで素晴らしい。これを心から味わってほしい。だいたい，題名である ″The Loneliness of the Long Distance Runner″には，正に詩の一節のような響きがある。実は私はこの題名に曲を付けていて，気持ちよく走っている時に口ずさんでいる。それだけで簡単にリラックスできるのだ。また映画化されており，群馬大の山西先生によると，映像も素晴らしいというが，残念ながらまだ見ていない。

このように俊足であり，走ることの喜びも知っているスミスは，院長のために勝つことを拒否し，ゴール手前で止まってしまう。もちろん院長は期待していた良き教育者としての名誉が得られないのだが，スミスも反逆に伴うささやかな喜びを一

Copyright © Enomoto PE Office, All rights reserved.

瞬得たに過ぎない。

出所してからは，より立派なこそ泥になるのだが，彼はもう決して走らないだろう。警官に追われれば走るのだろうが，もうそんなへまをしそうにないからだ。何とも気持ちの遣り場のない，陰気な話である。

ここで，「遥かなるセントラルパーク」を想い出して欲しい。話は失業中のスコットランド人，ヒュー・マクフェイルから始まる。彼は造船所のリベット工であったが，レイオフにあい，グラスゴーの炭坑夫となる。1928年の冬に国会議員であり，来るアムステルダム・オリンピックの選手でもある貴族が，その炭坑に視察に来る。100ヤード(約91.4m)競走の一騎打ちというエキジビションを行い，ヒューは勝つ。だが沢山の新聞記者が来ていたにもかかわらず，一切は報道されず，一週間後にクビになった。(なお，シリトーがイングランド中部のノッティンガムに生まれたのも1928年である。)

これらの話に，英国におけるアマチュアリズムという美名の本質が描かれている。スポーツは貴族のものであり，庶民のものではない。

英国の現実というものが，ヒューのような米国式ハッピーエンドを許さないのだろうか。しかし，それは他人事では無いかもしれない。寺山修司は，かつて「書を捨てよ，町へ出よう」(1975年)の中で，「(1970年前後の日本の若者は，社会に幻滅し，：紹介者補)長距離走者の孤独の主人公のように逃げる事だけが伝統になってしまった……のだろうか。」と，その頃の時代の閉塞感を評した。

さて，ご存知のように旧ソ連圏のステート・アマや日本の企業アマといった系譜を辿って，ついにプロがオリンピックの場で認知される。これは商業的価値としてのスポーツという要請によるもので，スポーツの利用価値が時代と共に変遷してきたことに過ぎない。ここにスポーツ本来の主体性はない。

大切なのは，誰でもスポーツを自分のものとして楽しむことができることであり，私はこの幸せを多くの人々と共有していきたいと願う。

なお，翻訳中にマラソンという言葉が多く出てくるが，原文は単にランニングであり，トラック外での長距離ロード走をマラソンと称する，日本流の誤用を避けてほしかったと思う。

(1997.9.15)

むむむ、紀伊国屋BOOK WEBによれば、新潮社版は1992年の改版があったが、現在は買えないらしい。しかし1977年版は在庫があるという。660円＋税。短編なので、英語を一生懸命に読んだ若いころの自分が愛おしい。（無駄なことをしたね。）

さて、久しぶりにこの文章を読み、ロずさむ自作の歌を思い出した。うん、なかなか素敵だ。それだけで空気が変わるような気がする。

Copyright © Enomoto PE Office, All rights reserved.

そこは良いのだが、現在では本書はそれほどでもないと思っている。（ビッグスリー自体にも疑問がある。そんなことを言わなければよかった。）結局スミスは走りから何も学ばなかったが、それはそうだろう。多くのランナーを見てきたが、走りから何かを学んだとは到底思えない人が多い。（もちろん学んだらしい人もあるが。）遥かなるセントラルパークや初秋では、走ることを通じて心の成長を得るが、本書では何もない。

しつこく言う、でもこれが正しい。走ることで成長ができたら、こんな楽なことはない。走ったって成長はできない、何にも変わらない。小説では成長で終わらなければならないという決まりは無い。娯楽小説であれば破滅（カタルシス）で終わらなければならないという決まりも無い。スミスは元の木阿弥、これぞリアリズムだ。

庶民はいつまでも庶民、これは上流階級が望む姿だ。下層民であるスミスの反逆を描きながらも、彼の反逆に喝采を求めながらも、結局本書は社会階層の固定化を望んでいる。そんな作品だ。

（2020.6.04）

Copyright © Enomoto PE Office, All rights reserved.